

# ハイブリッド日本人論：私たちが考える国民国家の限界と未来

## Hybrid Japan: The Limits and Potential of Our Nation-State

高橋理奈\*、関勇也\*\*、永田靖悟\*\*、遠藤萌子\*\*、白須あずさ\*\*、谷山智恵\*\*、  
水谷小百合\*\*、朴星辰\*、森川憂規\*、小代有希子\*\*

Rina Takahashi\*, Yuuya Seki\*\*, Seigo Nagata\*\*, Moeko Endo \*\*, Azusa Shirasu\*\*, Chie Taniyama \*\*,  
Sayuri Mizutani \*\*, Sungjin Park\*, Yuuki Morikawa\*, Yukiko Koshiro\*\*

\*日本大学国際関係学部国際総合政策学科, \*\*日本大学国際関係学部国際教養学科

E-mail koshiro.yukiko@nihon-u.ac.jp

### 〈本研究の主旨〉

戦前日本の植民地帝国は同化政策のもと、人種、文化、言語が異なる人々を日本人に「変えて」いた。戦後植民地を全て失った日本人は「単一民族」というアイデンティティを強め、外国人は日本人になれないという排他的考えを持つようになった。しかし今日の日本社会では国際結婚、ハーフ、クォーターの人々、移民労働者や帰化外国人、留学生などの数は増加の一途を辿っており、意識改革が必要だ。我がゼミナールでは大学生を対象に調査を行い、自国に暮らす他者を受け入れる姿勢にどのような変化があるか考察してみる。

### 〈リサーチ方法〉

日本大学国際関係学部の学生を対象にアンケートを実施した。年齢による経験値の違いや性別の違いによって、周囲の世界と自分を見る目が変わるかどうかを合わせて分析する。質問は次のようなものを用意した。日本はいつから単一民族国家になったか、外国人が日本人になるために必要な要件は何か、同化と言語・外見・血統の関連、国籍の意味、そして一つ以上のアイデンティティを持つ人を日本人として受け入れるかどうか、等である。

### 〈期待される分析と考察〉

南カリフォルニア大学日本文化宗教センター長ダンカン・ウィリアムズ教授は、ハイブリッド日本人—いわゆる混血の人々—を日本社会はもっと積極的に受け入れていくべきで、しかもハイブリッド日本人が自分のアイデンティティを自由に決めることを社会が容認することが望ましいと言う。このことは日本で暮らす外国人にも当てはめられる。日本社会は彼らに対して「日本人になったか」「外国人のままか」という二択を迫りがちである。彼らがより日本的になることを望む時は、彼らが祖国の文化・習慣などを捨てることを期待していないだろうか。「外国人も日本人になれる」「外国人も日本人として扱わねばならない」と考えることは寛容な姿勢のようだが、彼らは母国にも当然誇りを持っているはずで、それを認めなければ植民地時代の同化政策とあまり変わらないかもしれない。今後の日本社会は、多様なルーツを持つ人々が自由に自分のルーツを選択して生きていっても、不自由やプレッシャーを感じずに「ハイブリッド日本人」として生きていけるような環境を用意していくべきではないか。今回の調査によって、少なくとも我がキャンパスの学生たちがそのような意識改革を受け入れる準備があるかどうかを明らかにする。